中日新聞（2025年5月17日付）

掲載記事は中日新聞社の許諾を得て転載しています。

相次ぐキツネ目撃 どう共存

「ごん」の里 半田

識者 感染症の恐れ 触らず見守って

「ごんぎつねはまだいたんだ」―。半田市内の50代女性は、偶然見かけたキツネの親子に顔をほころばせる。かわいらしい見た目ではあるものの、感染症の危険や子どもたちへの被害が出ないか気をもむ。知多半島のキツネは一時、絶滅したと考えられていたが、近年、再び姿が多く確認されるようになった。キツネと、いかにして共存すべきだろうか。（内山陽貴）

4月下旬の午後1時ごろ、竹林のふもとの砂地にひょこんと1匹のキツネが座っていた。約50㍍先の道路からしばらく見つめていると、うろうろしたり、伸びをするようなしぐさを見せたりし、自然と頬が緩んだ。

近くの70代女性によると、この場所では4月初旬ごろから子ども4匹を含む家族が見られるようになった。自宅の窓から見られる範囲に巣穴があるが、これまでに怖い思いをしたことはないという。キツネは鳥獣保護管理法で守られているため、実害が出るまで捕獲や殺傷が禁じられている。

◀ 竹林のふもとに作った巣穴から顔を出すキツネ＝半田市内で

過去にも同じ地域で姿が見られたことはあるそうだが、住民らはごみ集積所や家庭菜園が荒らされたり、人とのトラブルが起こったりしないか危惧する。徒歩圏内には保育園もあり、子どもたちが触らないかも心配という。

20年以上、知多半島のキツネの生態を研究する日本福祉大工学部の福田秀志教授によると、半島では1960年ごろ、絶滅したとみられる。90年代に入って半島南部で再び確認されるようになり、以降は広い範囲で見られるようになった。

キツネは縄張り意識が強く、巣穴から半径1㌔ほどで暮らす。11月ごろから年末にかけては発情期を迎え、オスが広範囲に移動を始める。中には15㌔ほど動くキツネもいるといい、90年代のこの時期に県内の別の場所から長距離を移動し、半島に住み着いたと考えられている。

キツネと共存するために福田教授は「ふんを触らないこと、万が一触れてしまったらすぐにせっけんで洗うこと」が大切と強調。知多半島では野犬から寄生虫の一種「エキノコックス」が確認されており、体内に入ると肝機能障害や腹痛などの症状が出る。

これからの時期は、子ギツネが狩りの練習を始める。自宅にある靴やボールなどの小物を集めるようになるため、鍵の施錠や物の片付けを勧める。また基本的に夜行性のため、夜や早朝の運転時は急な飛び出しにも注意を呼びかけている。

近くの50代女性は「キツネがいるのは自然が豊かな証しで、市民として喜ばしいこと。この環境を、悲しいことが起こらないように守りたい」、福田教授は「南吉の童話と同じ場所に戻ってきた。地域の生態系の豊かさとして、一人一人が温かく見守っていってほしい」と、それぞれが地域の魅力につなげていく決意だ。

（許諾番号:20250521-32362）